

目次

発刊によせて 代表取締役会長 瀧井 宏一

ごあいさつ 代表取締役社長 水野 正雄

本史

序章 創立前史1

1. 盧溝橋事件と金属マグネシウム1

- 戦時体制の所産1
- マグネシウムの各種製法2
- 酸化マグネシウムの塩素化法3
- ジュラルミンと航空機の増産4
- 金属マグネシウムの増産要請5

2. 東洋一の佐久発電所7

- 浅野財閥と佐久発電所7
- 東洋一の佐久発電所の竣工8
- 古河、浅野の合弁事業として発足9

第1章 関東電化工業の創立13

1. 群馬県渋川に工場建設13

- 創立総会と第1回取締役会13
- 三菱仲通八号館の創立事務所14
- 工場用地の選定15
- 土地の買収に苦慮17
- 中村用水の付け替え18

2. 苦難の末、試運転・初操業を迎える19

- 建設工事計画19
- いよいよ建設工事始まる21
- 渋川工場の第一歩22

第2章 悪戦苦闘で築いた業界トップの実績	25
1. 全面操業に入る	25
逼迫する産業統制	25
第1期工事が完了、操業に入る	26
金属マグネシウムの精錬	28
過酷なマグネシウム生産現場	29
2. 人手不足に悩む	33
熟練を要するマグネシウム電解	33
応召者の急増で人員不足が深刻に	34
軍需会社に指定、膨れあがる人員	35
3. 業界トップの輝かしい生産実績	36
悪戦苦闘の操業維持	36
「嶄然顕頭角」の書	38
製造技術と問題点	39
大型塩化炉の威力	41
か性ソーダその他の生産	42
第3章 戦後再建への道	45
1. 新生・関東電化工業の出発	45
財閥解体と賠償指定	45
再生への第一歩	46
賠償指定に懸命の抵抗	48
軍事裁判を受ける	49
厳しい情勢続く	51
2. 復興期の生産	51
アミノ酸醬油に進出	51
木毛板の製造	54
さまざまな研究テーマ	54
3. ソーダメーカーとしての新たな出発	55
か性ソーダの生産制限撤廃へ	55
電解設備の復旧、増強	57
塩素製品の開発、拡大	58
第4章 有機化学分野への参入	61

1. 有機合成化学への指向、電気化学工業との提携	61
優秀な技術者群	61
塩化ビニルの研究に情熱	62
電気化学との業務提携	63
試験工場が完成	64
塩化水素の大量供給でソーダ事業の基盤確立	65
2. トリクロールエチレン、パークロールエチレンの事業化	66
アセチレン法トリクロールエチレン	66
需要開拓に全力	68
主力塩素製品に成長	69
パークロールエチレンの製造	70
プロパン法の開発、量産へ	72
渋川工場電解設備の増強と営業の活躍	74
3. 水素利用で「三本柱」企業の実現へ	77
シクロヘキサノンに注目	77
日本レイヨンのナイロン原料として	78
儲け頭として業績伸長に寄与	80
アジピン酸の企業化	81
トリレンジイソシアネートの研究	82
シクロヘキシルアミンとジシクロヘキシルアミンの企業化	84

第5章 水島コンビナートへの進出 87

1. 石油化学の勃興と新規立地工場計画	87
めざましい業容の伸張	87
阿久津に用地を取得	89
コンビナート進出への模索	90
当初の川崎進出案	92
2. 水島計画が浮上	94
社内の大勢は関東地区に	94
水島進出決定の背景	95
水島計画がスタート	97
資金手当てに苦慮	99
3. 水島工場が操業	100
建設工事の進捗	100
わが国最大の水銀電解槽	103
中間試験省略の咎め	105
低操業に苦しむ	106

4. 三菱化成との業務・資本提携	107
経営の悪化、電気化学の役員派遣要求	107
三菱化成の資本参加	108
三菱化成流の研究体制に	110
5. 第2期工事の完成と営業の苦闘	111
第2期工事の完成	111
営業の苦闘	113
6. 物流管理体制の確立	114
特別調査室の答申	114
輸装管理部の設置	115

第6章 渋川工場の再構築と多角化への模索

1. 渋川工場の地盤沈下	117
水島計画と渋川工場	117
進む地盤沈下	119
宇部アノンの終息	120
チクロ騒動の影響	121
電気化学向け塩化水素の供給停止	122
希望退職を募る	123
2. 新規事業、異業種への進出と撤退	124
さまざまな合理化策	124
ジクロロールベンゼンの製造	125
関東化成の設立	125
清涼飲料事業への進出	126
阿久津の土地利用	127
積極的だった三菱化成	129
生販一貫体制の採用	130
1年半で破綻、撤収へ	131

第7章 製法転換と古河グループへの復帰

1. 高度成長の終焉	133
激動の時代	133
苦難の始まり	134
公害問題の深刻化	135
2. 水銀法電解ソーダの製法転換	137

水銀汚染と製法転換	137
第1期製法転換	138
第1期転換計画の挫折	140
三菱化成との資本提携解消	141
3. 古河グループへの復帰と再建への道	143
新経営体制の発足	143
非常事態宣言	144
製法転換計画の修正	145
苦境のなかの構造改革	146
第二次石油危機と体質改善	147
CD委員会の設置	149
第8章 製法転換が完了、体質改善に全力を傾注	151
1. 第2次製法転換の完了	151
水島でDIM法を実施	151
第2次製法転換計画	152
転換事業の完了	153
2. 構造改善と新経営体制	155
第7代社長に岩垂修が就任	155
厳しい情勢、累損が拡大	158
ファイン系製品が上昇基調に	160
3. 再建への足固めとなった第1次、第2次中期経営計画	161
本格的な中期経営計画の策定	161
渋川に宿願の自家発電設備を実現	162
安定した労使関係の確立	164
平成不況のなかの第2次中期経営計画	165
K委員会の発足	166
品質保証体制の拡充、経営組織の簡素化	168
第9章 鉄系事業の展開	171
1. 鉄系事業の創始と展開	171
酸化チタン、酸化鉄の研究	171
森下弁柄工業と提携、日本酸化鉄工業の設立	172
合金粉、 γ -酸化鉄の系譜	174
MAPの尖兵となった γ -酸化鉄	175
メタルテープ用磁性粉の量産に先鞭	175
キャリアーの企業化	177

2. 再生・復活の一翼を担う戦略商品としての「MAP」	179
ファイン販売部の発足	179
目標は8ミリビデオだった	181
8ミリビデオの登場が遅れ苦戦	182
年産500トンを突破	183
3. 独自技術を確立した複写機用キャリア	185
苦難の歴史を積み重ねる	185
マグネタイトでヘガネス社と提携	186
品揃えと体制が整う	187
1成分系トナー向けのマグネタイト	187

第10章 フッ素系事業の展開 189

1. 六フッ化硫黄の企業化	189
フッ素化学に着目	189
苦闘を続けたフッ酸電解技術の開発	190
日本弗素化学工業の設立	192
六フッ化硫黄の販売	193
2. 半導体用特殊材料ガスの成長	195
新たなフッ化物の模索	195
独自のプロセスでシェアを拡大した四フッ化炭素	196
ガスディーラーを代理店に起用	197
多彩なフッ素系半導体用ガスのラインナップ	198
3. フッ素系排ガス処理装置の開発、新規フッ化物の展望	199
「カンデンエフトール」の開発	199
期待される有機フッ素化合物	200
六フッ化リン酸リチウムの事業化	201

終章 復配、創立60周年、新世紀への挑戦 203

1. 20年ぶりに宿願の復配を成就	203
平成不況の只中で迎えた創立60周年	203
戦後初めての2年連続マイナス成長	204
第8代社長に瀧井宏一が就任	205
第3次中期経営計画の策定	206
20年ぶりの復配成る	208
苦闘の連続	209

2. 構造改革・体質改善に邁進	211
人員の抑制、化成品部門の合理化	211
ファイン第三の柱と期待される電池材料	212
3期連続の増収増益	213
事業構造の転換に成功	215
新賃金体系への移行	215
工場整備のスタート	216
3. 環境と調和をはかり、信頼される高収益企業へ	218
新体制で新世紀へ底固め	218
第4次中期経営計画で「企業目標」を達成	220
地球環境との調和	220
「環境・安全」に関する関東電化宣言	223
現況	225
研究開発	226
渋川工場	230
水島工場	234
本社	238
資料・年表	
原始定款	241
現行定款	243
歴代会長・社長	246
現役員	247
役員任期一覧	248
大株主の変遷	252
資本金の推移	253
財務諸表の推移	254
部門別売上高の推移	258
現組織図	260
従業員数の推移	262
製造工程図	263
主要製品の変遷	264
事業所一覧	269
関係会社沿革系統図	270
関係会社	272
年表	273
編集後記	

凡 例

1. 本史の記述は原則として平成11年1月までとした。
2. 用字用語は原則として常用漢字および現代仮名遣いを使用した。固有名詞、慣用句、専門用語などは必ずしもこれによらなかった。
3. 年号は原則として元号を主体とし、各項の初出に西暦を併記した。
4. 法人名は原則として「株式会社」「有限会社」などを省略した。また、一部の会社名については、2度目から「工業」の文字を略すなど略称を用いた。
5. 人名は歴史的記述の通例にならない敬称は省略し、必要時のみ記述当時の役職名を付した。
6. 数字は算用数字を主体とし、万、億の単位語を併用した。